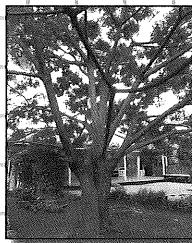


屋敷林の中で自然いっぱいの暮らし



中瀬幼稚園(東京都杉並区)

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第9回は東京都杉並区にある中瀬幼稚園。武蔵野の屋敷林をそのままにした園庭の中で、子どもたちがたくさんの命とふれ合いながら遊んでいます。



西武新宿線の井荻駅から線路に沿って商店街を少し歩き、曲がると、そこは一戸建てがゆつたり並ぶ閑静な住宅地。ふと目線を上げると、そんな住宅地にあるとは思えない、うつそうとした緑が目に飛び込んできた。を目指す中瀬幼稚園はあの屋敷林の中に違いないと進むが、あまりの緑の深さに圧倒される。これはどこかの神社で、幼稚園は違う場所なのではと心配になりながら、深い緑に沿つてぐるっと回つていくと、やつと幼稚園の門が見えた。

門から見た園庭は、まるで自然のままにしきるキャンプ場のように思えた。朝の穏やかな光の中、園庭のそこここで、アウトドアスタイルに身を包んで竹ぼうきを手に庭掃除をしているスタッフの姿も、その印象を強めた。みんな朝の仕事に余念がない。

程なく園の中に招き入れられた私たちは、園長の井口佳子先生から、「荷物を置いてスタッフと一緒に動いてください」と伝えられた。一日、お客様として過ごす気分でいたことが場違いだったことを、

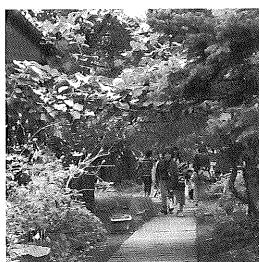
その時深く感じた。誰が訪問しても、仲間の一人として迎え入れて一緒に過ごしていくのが、ここではあたりまえことなのである。

◆子どもたちの朝はゆっくり始まる

掃除が終わると、スタッフ全員が職員室に集まって、立つたまま打ち合わせが始まった。それぞれのクラスの予定が簡単に報告された。井口先生からは、岩手県の仮設住宅から届いたジャガイモをそろそろ食べたい旨が伝えられ、年長組はその日の計画を変更して、園庭の真ん中にある竈でジャガイモを調理して食べることになった。

保護者と子どもたちがちらほら門をくぐりだし、再びスタッフは持ち場に分かれていった。

子どもたちが来る前は張り詰めた緊張感が感じられたが、子どもたちが園に足を踏み入れ始めてからは、一日、時間



はゆっくり流れていった。

早々に荷物を置いて好きな遊びに出かける子どももいれば、リュックを背負つたまま、

時間をかけて園庭の草花に朝

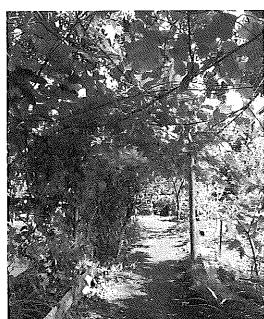
のあいさつをして回っている子どももいる。それぞれの子どもたち、親たちが、好きな道を通って自分たちのペースで、自分たちの思いで園の時間に気持ちを切り替えていく。幼稚園の朝はゆっくり始まるのがいい！

改めて朝の時間の大切さを感じた。

◆豊かな自然環境の力

そんなゆっくりした朝を生み出しているのは、思わず立ち止まりたくなる豊かな自然環境の力によるところが大きい。

その豊かな環境は、もともと屋敷林の一部としてあったものだと



思つていたら、「園庭を家庭の庭の延長に」という発想で、十五年前ぐらいから、遊べる植物、食べられる植物をさらに増やしていったということ。その当時は、園庭の真ん中に土の山を作つたり木を植えたりすることは受け入れられにくいことだったが、子どもたちに興味を持つてもらいたいものを真ん中に置くことを信念にして、変えてきたということである。今は、子どもたちが身近に暮らすといいだろうと考えられるありとあらゆる植物が植えられている。いろいろな芽が出ていること、花が咲いていること、実がなること、それを感じながら、立ち止まつたり、気をつけて歩いたりしてほしいと考え、植物を囲う柵がない。



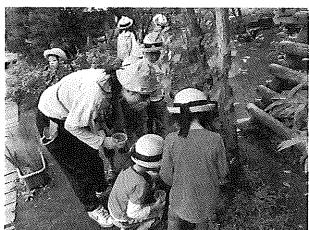
井口先生は、保育時間中にごく自然に園庭の植物の手入れをしていらした。庭の真ん中で低い姿勢で作業をしていると、子どもの声がよく聞こえ、子どもの様子がよく見えるのだそうだ。日常的

に保護者にも庭の手入れを手伝つてもらつているようで、この日も庭作業をしている保護者の姿が見受けられた。「生き生きと大人たちが仕事をしていること、そういう人たちが園の中で過ごしているということが必要」という考え方が貫かれている。

◆至るところに自然の恵み

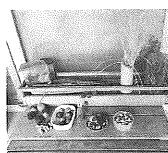
大人が園の自然にかかわりながら作業をしている傍らで、子どもたちもごくごく自然に花を摘んだり、実を拾つたり、また、園庭に生息する虫や小さな生き物に興味を持つたりしていく。

園庭のそこかしこに、しゃがみ込む子どもの姿が見られた。そして、手には何かしら自然の恵みを持つているのだ。



園舎の中のいろいろな所に、さり

げなく草花や実が飾られているのも、子どもたちと自然の結び付きを強める働きかけをしている。



圧巻は、ベビーバス

にいっぱい集められたセミの抜け殻であった。仲間同士で考え合つて、いろいろ工夫して数えた過程が見てとれる掲示、抜け殻の総数の掲示もあった。

見つけ、集め、試行錯誤して数える。ずっとずっと積み重ねられてきている豊かな自然と子どもたち、先生たちの共生の姿の結実をそこに見た思いがした。

◆各クラスの活動

朝の時間、ゆっくり思い思いの遊びをしたり、飼育物の世話をしたりして過ごして、十時ごろから、



▲数える工夫



クラスの活動がそれぞれ緩やかに始まつていった。
広いウッドデッキの側にあるコンクリート敷きのスペースで、年少2クラスが絵の具の活動を始めた。大きな段ボール箱を開いたものに、思い思いの色で自由に描いていく。そのうち、担任は、自分の顔や洋服にも色づけするよう子どもたちをさりげなく促していく。子どもたちも自分たちの顔や足に描いたり、より開放的な活動になつていった。

年中の1クラスは、「竹の子村」と呼ばれている裏の竹林に出かけていった。



◆園生活の日常性

そして、年長組は、予定変更して取り組むことになったジャガイモをゆでる活動を始めた。竈まわりの清掃から始まって、きれいになつたところで、年長児みんなで集まって、火の神にお祈りする儀式が始まった。それから火がつけられ、拾ってきた枯れ

枝が子どもたちによつて、くべられていつた。ゆで上がつたジャガイモは、お弁当を食べ終わつた年少児にも届けられ、クラス前のデッキでおいしそうに食べてた。届けられたおすそ分けを縁側で食べている日本の昔の一コマがふと思ひ出された。

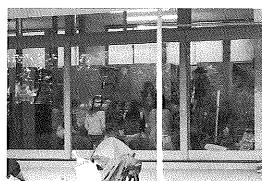
頂き物が届いたり、収穫物があつたりしたら、おいしい時期に調理して、ありがたくみんなで食べる、そういう日常性が大事にされているのである。



◆親の活動

子どもたちがそれぞれの活動をしているころ、別棟では、有志の親が活動していた。この日は、園で長年使つてゐるタオルの繕い作業をしていた。「夫もこの幼稚園出身なのですが、夫が園児だったころから大事に使われてゐるタオルなんですね」という話をしてくれた。「モノは修理しながら大切に使う」という中瀬幼稚園の精神が保護者の中にも深く浸透していることを感じた。

保護者による被災地支援の活動も盛んな様子であった。岩手県宮古市田老の仮設住宅の方たちの「何か手仕事をして楽しみ、それが収入になればうれしい」という声から、刺し子のコースター作りを思いつき、材料や必要なものをそろえ、田老の方々に作つてもらう活動を進めている。そのつながりで、ジャガイモも送られてきている。



教師も、親も子どもも、今起こっていること、世の中のことと接点を持つことが大事と考え、井口先生をはじめ先生方自ら何度も被災地に足を運び、でかける支援をしたり、行つた時に映像を撮つてきて子どもたちに見せているという。何回も親向けの勉強会や映画会もしてきたということである。

◆子どもたちが始めるありのままの遊び

一〇〇九年の二月から三月にかけた中瀬幼稚園の子どもたちの姿を追つたドキュメンタリー映画がある。「風のなかで むしのいのちくさのいのちものいのち」という題のその映画を数年前に一度見たことがある。子どもの目線で子どもの体験しているありのままを残したその映画は、「やりたいことを見つけて思う存分取り組む生活が、子ども時代には何よりも大切」だということを淡淡と語つていた。実際に園を訪問して、身体を巧みに使って、思う存分やりたいことをしている子どもたちの姿を目の当たりにして、もう一度映画が見たくなった。

参考文献等

- 1 井口佳子『幼児期を考える——ある園の生活より』
相川書房 二〇〇四年
- 2 映画「風のなかで むしのいのちくさのいのちものいのち」

制作／グループ現代 二〇〇九年

*上映会用DVDの貸し出しもあります。

(問い合わせ先 中瀬幼稚園)



一 訪問メモ

- ◆ 訪問時期：2012年10月
- ◆ 訪問場所：中瀬幼稚園
- ◆ [住所] 東京都杉並区下井草4-20-3
- ◆ [電話] 03-3395-3636